

大噴火の後のピナツボ火山周辺の状況



今世紀世界で4番目といわれる規模の大噴火を起こしたピナツボ火山周辺は、6月15日のわずか半日あまりの噴火により様相が一変した。厚く降り積もった火山灰により多くの家屋が破壊され、山地に住んでいた住民は、火砕流により生活に必要なものすべてを失った。大量の火砕流、降下堆積物が、泥流(ラハール)となって山麓に流れ出し、河川の氾濫などによる二次災害が、今後長期にわたり火山の周辺の社会に深刻な影響を与えようとしている。今回の噴火では、適確な警報や避難措置により、直接的な被害は死者300名程度に留まったが、二次災害による被害はそれを越えつつある。

(気象研究所地震火山研究部 浜田信生)

1(上)、火口の北西15kmのMaraunot川とBalin Baquera川の合流部に流れ込こんだ火砕流先端部分。



2(中)、火山灰に被われた火口の北西15kmのOgik部落、火砕流の先端部に近く熱雲を被ったため、木々の葉は焦げ枯死寸前であるが、焼失した民家は認められない。



3(下)、大噴火直後の泥流により流失したアンヘレス市のアバカン橋の跡、泥流によりルソン島中部の幹線交通網は寸断状態となっている。